

2025年3月2日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教27「証言を受け継ぐ務め」

申命記19：15、ヨハネ5：31～36

ここには「証し」(マルトゥレオー)という言葉が何度も繰り返されています。この言葉はヨハネ福音書において特徴的な言葉の一つと申し上げてよいでしょう。「証し」と訳されますが、元々これは法廷用語でして、裁判における証言という意味があります。例えば、誰かの無実を証言する場合、その証言が人の人生を大きく変えることとなります。証言は、その人生を左右する重みを持ちます。イエスさまについての証言もまたそのような重みを持っています。その証言にわたしたちの救い、生き死にかかっているのです。今日は、その証言をする「証人」について考えたいと思います。

証人もまた証言と同じくらい重要です。誰を証人に立てるかで証言の信憑性、有効性が大きく変わってくるからです。イエスさまは「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない」(31節)と言われます。自分で自分の証しを立てるわけにはいかないというのです。世間一般でも、当事者本人が証言台に立っていくら無実を訴えても、それは説得力を持ちません。本人以外の誰かが証言しなければならない。聖書でも「およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人、ないし三人の証人の証言によって、その事は立証されねばならない」(申命記19：15)とあります。イエスさまが言われた「その証しは真実ではない」という言葉の背後には、この御言葉があると思います。そしてここに「二人また三人の原則」があります。これはマタイ福音書では、イエスさまが教会の交わりを教えられる中でこの原則をお用いになられ「二人また三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ18：20)と教えられました。

その証人は、イエスさまがご自身でなさることではない。「わたしについて証しをなさる方は別におられる」(32節)と言われます。それを聞いたユダヤ人たちは、洗礼者ヨハネの存在を思い起こしたでしょう。洗礼者ヨハネもイエスさまのことを証言した証人です。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(2：29)とヨハネはイエスさまについて証言しました。それは正しい証言です。でもヨハネはこうも言っています。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない・・・あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」(3：27～30)ヨハネもまた一人では何もできない。天から与えられなければ救い主を証言できないのです。そこに人間の限界があります。そこはわきまえておく必要があります。神さまは、わたしたち人間の証人に完全に頼ってはられません。

「ヨハネは、燃えて輝くともし火であった」(35節)とあります。「ともし火」は、英語ではランプです。ランプは油がある間は燃え続けるでしょう。だから「しばらくの間はその光のもとで喜び楽しむ」(35節)ことができる。けれども、油が切れれば燃え尽きる。それは完全ではないし永遠ではありません。そこに人間の限界があります。ここを読みながら、例えば、旧約聖書に登場してくるイスラエルの王たちや預言者を思い浮かべます。サウルもダビデも油を注がれて王になります。その時は人々は喜び、熱狂する。けれどもやがてその油が切れる。そのともし火が燃え尽きてしまう時が来るのです。そこで間違いを犯す。サウルもダビデもやがて御心に適わなくなりました。それはやはり人間の限界でありますし、人間は完全には証人になりきれない弱さを抱えています。

牧師もまた証人として立てられておりますけれども、しかし完全ではないこともわきまえておく必要があります。先週は、教師検定試験があつて忙しくしておりました。牧師が不足している時代に、教会は牧師を望んでいるでしょう。けれども誰でもというわけにはいかないのです。自分でなりたいからではなく、客観的に召命が確かめられなければなりません。そこで残念ながら不合格になる人もいます。もちろん伝道者になってからも常にこの召命は問われています。それこそ油が切れて燃え尽きてしまうこともあるかもしれない。それが潮時だと思ひますし、そのことは、いつでも伝道者はわきまえていなければならないことです。

けれども、イエスさまは今日のところで「あなたたちが救われるために、これらのことを言っておく」（34節）と言われます。そのような限界を抱えていても、それでもイエスさまは、わたしたちが救われるためにヨハネを用いられる。そのヨハネを通してご自身を証しされるのです。それはわたしたちも皆同じです。「しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしが行なっている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証ししている」（36節）わたしたちの拙い証言をはるかに超える証言をイエスさまは教会に託されました。「父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業」とは、言うまでもなくイエスさまの十字架とよみがえりの御業です。

その証言は、わたしたちの救い、命そのものです。ここに永遠の命の約束があります。教会はその証言を語り伝えます。その意味で、証言は命のバトンです。わたしたち証言者一人一人は弱くても、しっかりこのバトンを渡していけばいい。そのための教会です。イエスさまは「二人または三人がわたしの名によって集まるところにはわたしもその中にいる」と約束されました。一人ではできなくても、仲間がいる。証言を継承していく人たちがいる。何より教会の頭であるイエスさまがその御業を行ってくださる。そこでこそ命のバトンは受け継がれていくことでしょう。

天の父よ。あなたの救いを証しする証人として召されている責任を思ひます。一人では到底それを担い得る者ではありません。けれどもイエスさまが十字架とよみがえりの御業によって、わたしたちをこの務めに召し、教会にこの証言を託してくださいました。ほんのひとときしかその輝きを保てない者ですが、どうぞあなたの憐れみによってわたしたちを用いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。